

10月5日（日）サムエル記第一2章26節

「一方、少年サムエルは、主にも人にもいつくしまれ、ますます成長した。」

ここでは「一方」と訳されている逆接の意味を表す接続詞が用いられています。つまり、少年サムエルとエリの二人の息子たちが対比されています。ここで「いつくしまれ」と訳されている言葉は、もともと良いという意味があります。例えば、創世記1章31節の「見よ、それは非常に良かった。」と同じ言葉が用いられています。神がご自分の作られたすべてのものを見られて、見よ、それは非常に良かったというのは、被造物の完全さ、美しさ、互いの調和が完璧で、神はそれに満足していることを意味しています。ですから、少年サムエルが主にも人にもいつくしまれというのは、主の目にも人の目にも、サムエルの言動、生活、態度などのすべてが主にも人にも良いと見られ、主ご自身も、そして少年サムエルを見守っている周りの人たちも、サムエルのことについては納得し、彼のことについては満足のいくものであったということだったのでしょうか。ここで教えられることは、主に対して良い証しを立てることのできる者は、必ず人に対しても良い証しを立てることができるということです。そして、21節で「少年サムエルは主のみもとで成長した」とあります。人は主のみもとで成長する時に、主にも人にもいつくしまれて成長することができます。そのことは、罪に罪を重ねて、人々から悪評を受け、彼らの命を奪うことが主のみこころだと言われているエリの二人の息子とは対照的であることから分かります。教会に与えられている子どもたちが、エリの二人の息子のようにではなく、サムエルのように主のみもとで成長し、神にも人にもいつくしまれて、ますます成長できるように私たちも祈ってまいりましょう。

10月6日（月）サムエル記第一2章27～29節

「なぜあなたがたは、わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住まいで足蹴にするのか。なぜあなたは、わたしよりも自分の息子たちを重んじて、わたしの民イスラエルのすべてのささげ物のうちの、最上の部分で自分たちを肥やそうとするのか。」（29節）

27節の「神の人」とは預言者を指します。この者が神から遣わされ、「主はこう言われる」と神のことばを告げます。まず27節では、イスラエルの民がエジプトで奴隷状態であった時に、出エジプトの大いなるみわざによってご自分の栄光を現されることで、主はご自身を彼らに明らかにされました。次に28節で、「その家を選んで」とは、レビ族が選ばれ、そこから祭司が出るようになったことを意味しています。エポデは、祭司の着用する装束で、祭壇に上って香をたくという祭司の役割を行うことを意味しています。そしてレビ族は、土地が割り当てられない代わりに、イスラエルの民の食物のささげ物の中から、祭司に割り当てられたものが与えられました。そして29節

では、神のエリに対する非難が始まります。まず「なぜあなたがたは、わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住まいで足蹴にするのか。」というのは、エリの二人の息子たちが、ささげ物の肉を横取りしたり、力づくで奪い取ろうとして、17節「主へのささげ物を侮った」ことを言っているのでしょう。次の非難は、主よりも自分の息子たちを重んじたということです。私たちは、クリスチャンとして時に、主よりも家族や周りの人との人間関係を大切にすることがあります。それが決して悪いということではありませんが、そのように人間関係を大切にすることが必ずしも主に対する証しにな、るとは限りません。むしろ、私たちが第一にしなければならないのは主であり、主を第一にするとところに祝福があります。三つ目のイスラエルのすべてのささげ物のうちの、最上の部分で自分たちを肥やすとは、本来最上の部分が、主にささげられるべき物なのですが、それを自分たちのものにしていたということです。これは、言い替えれば、主のものを盗んでいたということにもなります。主は、すべてを見ておられ、すべてをご存じです。その上で、主は私たちの罪や問題や間違いを指摘されます。それは、私たちが悔い改めて主に立ち返るためです。エリの二人の息子たちは父の言うことを聞こうとしませんでした。が、(25節) 私たちも主の言われることを聞こうとしない信仰者にならないようにしなければなりません。

10月7日(火) サムエル記第一2章30節

「それゆえーイスラエルの神、主のことばーあなたの家と、あなたの父の家は、永遠にわたしの前に歩むとわたしは確かに言ったものの、今やー主のことばーそれは絶対にあり得ない。わたしを重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられるからだ。」

ここでエリのもとに遣わされた神の人は、「イスラエルの神、主のことば」「主のことば」と、二回繰り返しながら、語られていることは間違いなく主のことばであることを強調しています。そして、ここでは神のことばとしてさばきが語られていますが、神のことばは時が来たなら、必ず成就することのゆえに、それは厳粛に受けとめられなければなりません。

「あなたの家とあなたの父の家は、永遠にわたしの前を歩むとわたしは確かに言ったものの」というのは、出エジプト記29章9節のことば「アロンとその子らに飾り帯を締め、ターバンを巻く。永遠の掟によって、祭司の職は彼らのものとなる。あなたはアロンとその子らを祭司職に任命せよ。」を指していると思われます。ここで、確かに、「永遠の掟によって、祭司の職は彼らのものとなる。」と言われていました。しかし、ここでは「それは絶対にあり得ない」と、祭司職がエリの家系から取り去られようとしています。それは、まさにエリの家族に対する神のさばきです。そして、その神のさばきが下る理由は、「わたしを蔑む者は軽んじられるからだ」ということです。エリの息子たちは、主へのささげ物を侮りましたが、(17節) それは、主を侮ったに等しいと言えます。また、

主よりも自分の息子たちを重んじ、イスラエルのすべてのささげ物のうちの、最上の部分で自分たちを肥やそうとしました。これらは、すべて主を蔑む行為です。私たちの信仰、私たちの生活、私たちの行いは、主を重んじるものとなっているのでしょうか。もしくは主を蔑むものなのでしょうか。主は、すべてをご存じの上で、私たちの行いに対してふさわしくさばかれるのです。

10月8日（水）サムエル記第一2章31、32節

「イスラエルが幸せにされるどんなときにも、あなたはわたしの住まいの衰退を見るようになる。あなたの家には、いつまでも、年長者がいない。」（32節）

昨日も書きましたが、主のことばは時が来れば必ず成就します。ですから、「見よ、その時代が来る」と言われています。そして、31、32節で、神のさばきがどのように来るかが語られています。「そのとき、わたしはあなたの腕と、あなたの父の家の腕を切り落とす。」というのは、エリ之家にさばきが下ることが語られています。神のさばきは、エリと二人の息子たちだけではなく、その子孫にまで及びます。「あなたの家には年長者がいなくなる。」「あなたの家には、いつまでも、年長者がいない」と繰り返されていますが、これはエリの子孫が、若くして死に絶えてしまい、年長者になるまで生きられないことを意味しています。長命であることは、神の祝福を意味していますので、短命であることは、神のさばきとしてののろいを意味していると言えます。さらに、32節では、主の恵みによってイスラエルが幸せにされるときにも、祭司たちは、その幸いをともに喜び、楽しむことができず、衰退を見るようになります。

ここで教えられることは、エリと二人の息子たちの罪は、自分たちに対するさばきにとどまらず、その影響は子孫にまで及びます。つまり、人の罪は、そのようにして周りに大きな負の影響をもたらすということです。私たちは、自分の罪を軽く考える傾向がありますが、聖書は私たちに罪がどれほど大きな問題となるかを教えています。罪によって周りに負の影響をもたらす者ではなく、主の御前に正しく歩むことで、周りに主の祝福を分け与える者でありたいと思わされます。

10月9日（木）サムエル記第一2章33、34節

「わたしは、あなたのために、わたしの祭壇から一人の人を断ち切らないでおく。そのことはあなたの目を衰えさせ、あなたのたましいをやつれさせる。あなたの家に生まれてくる者はみな、人の手によって死ぬ。」

「わたしの祭壇から一人の人を断ち切らないでおく」というのは、エブヤタルだろうと思われま

す。(22章20節)「そのことはあなたの目を衰えさせ、あなたのたましいをやつれさせる」と言われています。目を衰えさせ、たましいをやつれさせるというのは、悲しみと落胆の象徴的な表現ですが、22章11節から見てまいりますと、ノブの町にいた祭司たちがダビデに味方し、ダビデが逃げていることを知りながら、それをサウル王に知らせませんでした。そのことがサウル王を怒らせ、祭司たちを殺すように命じました。まさに、この出来事がエリを悲しませ、落胆させたのです。「あなたの家に生まれてくる者はみな、人の手によって死ぬ」とは、エリの家に生まれてくる子孫もみな、剣によって殺されるようなかたちで死を迎えることを指し、平安なかたちでの最後を迎えることがないということを意味しています。実際に34節にありますように、二人の息子のホフニとピネハスが、同じ日に死にました。(4章11節)それが、エリの家の子孫の最後を象徴しています。そして、これらのことは、すべて神のさばきの結果です。罪は、決して人を幸せにはしません。むしろ、罪は神のさばきを呼び起こし、人を悲しませ、落胆させます。そして、自分だけではなく子孫にまで神のさばきが及ぶほどに大きな影響を与えることとなります。

私たちは、主の御前に悔い改めていない罪はないでしょうか。罪を悔い改めて主の助けをいただきつつ主の御前に正しい歩みをなし、主を喜ばせる者とさせていたいただきたいと思わされます。

10月10日(金) サムエル記第一2章35, 36節

「わたしは、わたしの心と思いの中で事を行う忠実な祭司を、わたしのために起こし、彼のために確かな家を建てよう。彼は、わたしに油注がれた者の前をいつまでも歩む。」(35節)

35節は、誰のことを言っているのかということについて、さまざまな議論がなされていますが、恐らく祭司ツァドクのことではないかと思われまます。そしてイエスキリストこそまことの王でありまことの祭司となられました。まさに35節にありますように、イエスは父なる神の心と思いの中で事を行う忠実な祭司なのです。この方を神は、私たちのために遣わしてくださいました。

36節では、エリの家生き残った者たちはみな、祭司職を剥奪されたことによって困窮することが預言されています。そのようにして食べるにも困るようになります。まさに、ささげ物のうちの、最上の部分で私腹を肥やす祭司たちに対して主のさばきが下り、彼らの貪欲の罪がさばかれ、また主を侮るという彼らの高ぶりがさばかれることで、彼らは貧困の中を歩むこととなり、主の御前にへりくだらされることとなりました。私たちは、エリの息子たちと少年サムエルの対比をもう一度考えさせられます。宮にいても罪を犯すエリの二人の息子たちと、宮でひたすら主に仕えようとしていたサムエルの姿には大きな違いがあり、それが主のさばきを通してさらに大きなものとなりました。私たちも、主を恐れつつ、主の御前にへりくだって、主のしもべとして主に仕える者でありたいと願わされます。

10月11日（土）サムエル記第一3章1節

「さて、少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」

サムエルはエリのもとで主に仕えていました。恐らくは、神殿での祭儀に関する務めにおいてエリを助ける働きをしていたのだらうと思われます。主に忠実に仕えるサムエルの姿が、神のさばきを宣言されているエリの二人の息子たちやその子孫たちと対比されているように思えます。さらに、私たちは、人のもとで主に仕えることができます。例えば、親のもとで主に仕えるとか、家族のもとや上司のもとで主に仕えるということも可能です。ですから、私たちも主が置いてくださっているところで、神と人ともに仕えてまいりたいと思われます。

「そのころ主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」とあります。幻は、主のことばとの関連で、預言的な幻と呼ばれるものがあります。それは何かと申しますと、まずは神が預言者に語るべきことばを告げ、それを預言者が、人々にことばとして告げ知らせるというものです。ですから、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかったというのは、神ご自身が、みこころにおいてイスラエルの民に神のことばを語るのを拒まれたとも考えられますが、別の見方をすれば、神のことばを受けて、それを人々に伝える者もいなかったということになります。例えば、祭司たちもささげ物において罪を犯しているだけではなく、神のことばを受けて、それを人々に語るということにおいても役割を果すことができていなかったということになるでしょう。私たちの群れにおいても「主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」ということがないように、むしろ常に主のことばが示され、それを幻として十分に説き明かされるようにと願います。そして聞く一人一人も、ただ聞くだけではなく、聞いて行う信仰が与えられますように。